

---

# 逆行的束縛再考

中 村 典 生

---

## 1. はじめに

生成文法 (generative grammar) 理論は、人間が持っている言語知識 (knowledge of language) がどのようなものであり、どのような過程で習得されるのかということの解明を目指している。この理論が誕生してはや40年になるが、その間、何度かの大きな理論的変遷を経てきた。そして現在、この理論は過去に例をみない転換期にさしかかっている。それはChomskyが1993年の論文の中で提案した、ミニマリストプログラム (minimalist program) に端を発する大変革である。現在の急務は、いわゆるGB理論<sup>1</sup>で説明されてきたことをミニマリストの枠組みで捉え直すということであるが、いまだ方向性が定まっているとは言い難い状況である。このような状況下で最も重要なことは、理論に頼るのではなく、データに立ち戻ることであるように思われる<sup>2</sup>。

そこで、本稿では以下の2つ目標を設定する。まず一つは、Belletti & Rizzi (1988) や Nakamura (1993) (1994a) など議論されている、心理動詞 (psych-verb) を含む文に主としてみられる照応形 (anaphor) の特異な束縛 (binding) 現象について、これまでの研究の流れをたどることによって、データを吟味し直し、問題点を明らかにすることであり、もう一つは、その明らかになった問題点をふまえ、現在のミニマリストの枠組みで、この特異な束縛現象がどのように説明できるかということを探ることである。まず、典型的な照応形のふるまいを検証することから議論をはじめることとする。

## 2. 照応形のふるまいについて

### 2.1 照応形の分布

再起代名詞 (*myself, himself* など) と相互代名詞 (*each other* など) を照応形と呼ぶ。照応形は特定範囲内に先行詞 (antecedent)、つまり、照応形と同じ人を指示する語を必要とする。以下に、例文を提示しながら、どのような場合に照応形と先行詞が適格な関係を結ぶことができるかについて考える。なお以降、細かな専門用語の解説は、紙面の関係上必要最小限にとどめるものとする。

(1a) のように、先行詞が主語位置にあり、照応形が目的語の位置にあるときは適格な文となるが、逆に (1b) のように目的語の位置に先行詞があり、主語の位置に照応形があると不適格な文

となる。(文頭の\*は非文(ungrammatical)であることを表す)

- (1) a. Ken<sub>i</sub> kicked friends of himself<sub>i</sub>.  
b. \*Friends of himself<sub>i</sub> like Ken<sub>i</sub>.

但し、単に主語位置に先行詞、目的語位置に照応形があればいいというわけではない。(2a)のように先行詞が主語内の一部である場合や、(2b)のように照応形が埋め込み文(embedded clause)の目的語の位置にあるような場合には非文となる。

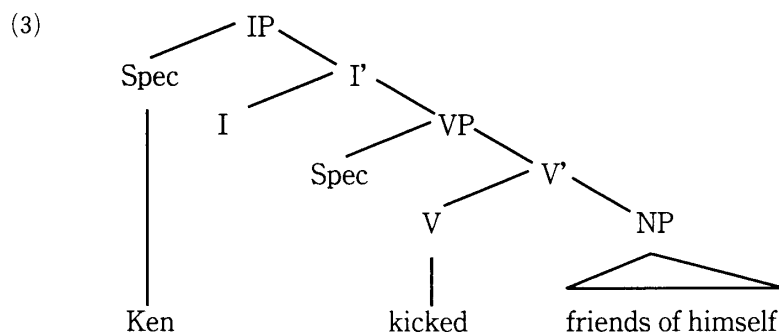
- (2) a. \*Ken<sub>i</sub>'s mother disciplines himself<sub>i</sub>.  
b. \*They<sub>i</sub> said that Ken met themselves<sub>i</sub>.

以上が照応形の典型的な分布である。次節では、これらのデータが生成文法ではどのように説明されてきたかについて概観する。

## 2.2 束縛原理A (Binding Condition A)

本節では、生成文法、特にGB理論の枠組みにおいて、照応形と先行詞の関係がどのように説明されてきたかをみることにする。

まず第一に、生成文法研究の大前提として、人間言語には構造があり、照応形と先行詞の関係なども含めた様々な文法現象は、この構造に基づいて規定されるという考え方があることを銘記したい。例えば、(1a)は次のような構造を持つとされる。



本稿でとりあげる照応形と先行詞の関係は、普遍文法を構成し、GB理論の中心的な原理の一つである、束縛原理A(Binding Condition A)によって説明される。以下に束縛原理Aと、この原理と関連のある概念の定義を示す。

### (4) 束縛原理A

照応形は統率範疇内で束縛されなければならない

(cf: Chomsky (1986a : 166))

#### 統率範疇

$\alpha$  が  $\beta$  と  $\beta$  を含む最小の S（文=IP），または NP（名詞句）であるとき， $\alpha$  は  $\beta$  の統率範疇である  
(cf: Chomsky (1986a : 169))

#### 束縛

$\alpha$  が  $\beta$  を構成素統御(c-command)し， $\alpha$  と  $\beta$  が同一の指標を付与されている場合， $\alpha$  は  $\beta$  を束縛するという  
(原口・中村 (1992:54))

#### 構成素統御

$\alpha$  が  $\beta$  を支配(domination)せず， $\alpha$  を支配するすべての  $\gamma$  が  $\beta$  を支配する場合， $\alpha$  は  $\beta$  を構成素統御する  
(cf: Chomsky (1986a : 162))

#### 支配

枝分かれ図(tree diagram)において，接点(node)Aが接点Bより高い位置にあり，かつAからBへ下に向かってたどってゆくことができる ならば，AはBを支配すると言う  
(原口・中村 (1992:152))

以上の束縛原理Aを簡単に言い直せば，(3)に示したような枝分かれ図において，先行詞の最初の枝分かれ接点の下位に照応形があり，かつ，先行詞と照応形がともに同じ最小の文（あるいは節）か名詞句内に含まれているとき，束縛原理Aが充たされると言える。

束縛原理Aを用いて(5)(=(1))と(6)(=(2))の文法性を説明してみる。

- (5) a. Ken<sub>i</sub> kicked friends of himself<sub>i</sub>.  
b. \*Friends of himself<sub>i</sub> like Ken<sub>i</sub>.
- (6) a. \*Ken<sub>i</sub>'s mother disciplines himself<sub>i</sub>.  
b. \*They<sub>i</sub> said that Ken met themselves<sub>i</sub>.

(5a)では先行詞が照応形よりも上位にあり（支配しており），先行詞，照応形ともに同一節内にあるので束縛原理Aを充たし適格な文となるのに対し，(5b)では先行詞，照応形ともに同一節内にはあるが，先行詞が照応形の下位にあるため，束縛原理Aを充たすことができず非文となると説明できる。また，(6a)では先行詞の統率範疇が主語NPになってしまい，その中に目的語である照応形が含まれないため非文となり，(6b)では目的語の統率範疇が埋め込み文になり，その中に主節の主語位置にある先行詞が含まれないので非文となると説明できる<sup>3</sup>。

以上のように，GB理論では照応形と先行詞の関係を，束縛原理Aで説明しようとしてきたことを概観した。しかし，全く束縛原理Aの反例となりそうな，非常に奇妙な振る舞いをする例があることが知られている。次節では，そのような例について考えることにする。

### 2.3 逆行的束縛 (Backward Binding)

人間の心理を表す動詞を心理動詞 (Psychological Verb) という。心理動詞には経験者 (Experiencer) の項<sup>4</sup>を主語位置にとるものと、目的語位置にとるものがある。

- (7) a. John fears the ghost. (John=Sub. .... Experiencer)
- b. The ghost worried John. (John=Obj. .... Experiencer)

Pesetsky(1990)にしたがい、便宜上、(7a)のように経験者を主語位置にとる心理動詞をES動詞 (Experiencer Subject Verb)、(7b)のように目的語位置にとる心理動詞をEO動詞 (Experiencer Object Verb)と呼ぶことにする。

EO動詞には他の動詞にはみられないいくつかの特性があることが知られている。特に、本稿で取り扱う照応形の束縛に関する特異性は、Belletti & Rizzi (1988) (以後B&R) 以来、多くの研究者に注目されている。2.2で論じたように、束縛原理Aにしたがえば、照応形は統率範疇内で先行詞に束縛されなければならない。したがって、主語位置に照応形があり、目的語位置に先行詞がある場合には、先行詞が照応形をc-統御できず、(8a)のように非文となるはずであるが、EO動詞を含む文では、(8b)のように適格な文となる。

- (8) a. \*Friends of himself<sub>i</sub> like John<sub>i</sub>. (= (5b))
- b. Pictures of himself<sub>i</sub> surprised John<sub>i</sub>.

(8b) がいわゆる逆行的束縛 (Backward Binding) と呼ばれる現象であり、束縛原理Aの反例となる。

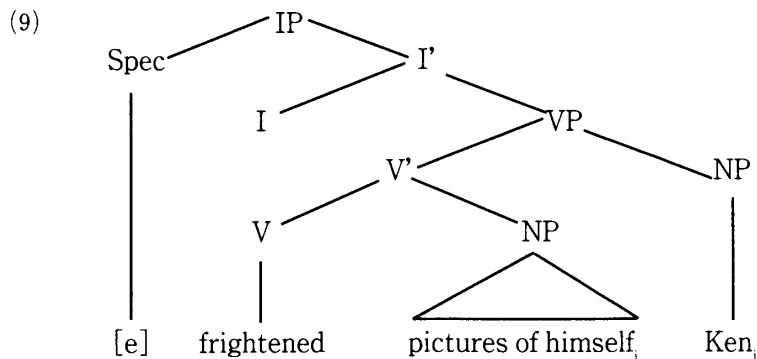
このようなEO動詞を含む文にみられる逆行的束縛現象が、束縛理論の反例ではなく、GBの枠組みで説明できるという議論をしたのがB&Rである。次の章では、B&Rの議論から、逆行的束縛に関する研究を振り返る。

### 3. 先行研究

EO動詞を含む文の逆行的束縛に関する先行研究は、B&Rが提唱した非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis) を受け入れるか、あるいはそれに反論するかという形で展開されてきた。本章ではまず、非対格仮説を概観し、次にそれに対する反例を示すことにする。さらに、非対格仮説の代案として、Campbell & Martin (1989), Stowell (1990) で提案され、Nakamura (1993) (1994a) で定式化された、経験者繰り上げ仮説 (Experiencer Raising Hypothesis) を紹介する。

#### 3.1 非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis)

非対格動詞はD-構造において主語位置が空になっており、移動によって主語がみたされる動詞である。B&Rは、イタリア語のデータを用いて、非対格動詞とEO動詞の文法現象の類似性を指摘し、EO動詞も非対格動詞の一種であり、派生主語を含む構文を構成すると主張した。例えばB&R



では、EO動詞を含む *Pictures of himself<sub>i</sub> frightened Ken<sub>i</sub>* は次のような基底構造を持つとされている。

この基底構造で注目すべき点は、照応形が先行詞である *Ken* よりも下位、つまり *c*－統御される位置にあることである。つまり、この構造を仮定し、基底で束縛原理Aが充たされと考えれば、心理動詞を含む文の照応形の生起に関する特異性が既存の枠組みで説明できるわけである。

ひとつ問題となるのは、照応形以外の語が主語位置に来る(10)のような場合である。

- (10) a. His<sub>i</sub> father surprised Ken<sub>i</sub>.  
 b. Ken<sub>i</sub>'s father surprised him<sub>i</sub>.

束縛原理には原理Aの他に代名詞類(pronominal)に係わる束縛原理Bと指示表現(R-expression)に係わる束縛原理Cがある。原理Bでは、代名詞類は統率範疇内で、原理Cでは指示表現はいかなる場合にも束縛されてはならないとされている。(9)の構造を仮定し、束縛原理A同様、束縛原理B・Cも基底でかかるとすると、(10a)の文では主語内にある代名詞 *his* が目的語 *Ken* に、(10b)では指示表現 *Ken* が *him* にそれぞれ *c*－統御されてしまうので、束縛原理B・C違反となってしまう。つまり、(10a-b)が不適格な文となるという、間違った予測をしてしまうことになるわけである。

そこでB&Rはこの問題点を解決するために、束縛原理AのみがD－構造でもS－構造でもかかってよい原理(anywhere condition)であり、一方、束縛原理B・CはS－構造のみでかかる原理であるという、束縛原理の適用レベル分けを仮定した。こう考えると、(10a-b)では基底で代名詞、指示表現がそれぞれ *c*－統御されているが、束縛原理B・Cは基底では適用されないため違反とはならない。その後、S－構造では代名詞・指示表現を含んだ名詞句はそれぞれ主語位置に移動するが、ここでも先行詞である *Ken* は主語よりも低い位置にあり、もはや束縛原理B・Cに抵触しないので、適格な文となることが説明できるわけである。

しかし、B&Rの非対格仮説には多くの反例が提出された。次節ではその反例のいくつかをみることにする。

### 3.2 B&Rに対する反論

B&RがEO動詞は非対格動詞であるという非対格仮説を唱えたのに対し、いくつかの論文の中でEO動詞が非対格動詞ではありえず、B&Rの主張は正しくないという証拠が提示されている。本節では、その中から、Stowell (1987)とNakamura (1993) (1994a)の議論をみることにする<sup>5</sup>。

#### 3.2.1 Stowell (1987)

Stowell (1987) は、as構文には、空所化(gapping)を許すか否かということに関して、主語・目的語間の非対称性 (subject/object asymmetry)があるという特性を指摘し、その特性を用いてEO動詞が非対格動詞ではないという証拠を提出している。

as構文は(11)のように、基底で目的語位置にある要素のみ空所化を許す。(eが空所を表す)

- (11) a. Bill is a liar, as Mary already knows e. (Transitive Object)  
b. \*John broke his promise, as e made Chamberlain finally change his policy.  
(Transitive Subject)  
c. Mary claimed that John was a fool, as was subsequently proven e to us all.  
(Passive Subject=Object)  
d. Mary said John was a fool, as seemed e obvious to everybody.  
(Raising Subject=Object)

もしB&Rが言うように、本当にEO動詞の主語が基底では目的語位置にあり、派生によって生じるとすれば、(11c-d)同様、EO動詞を含む文もas構文での空所化を許すはずである。しかし、その予想に反して、実際には(12)のように不適格な文となる。

- (12) \*Jenny appeared on TV now, as e amused Bill.

以上が、Stowell (1990)で示された、EO動詞が非対格動詞ではないという証拠である。

#### 3.2.2 Nakamura (1993) (1994a)

Nakamura (1993) (1994a)でも、B&Rの仮説に反して、EO動詞は非対格動詞ではないという議論が展開されている。ここで提示されている最も強力な反例は、非対格仮説では非文法性が説明できない、主語位置に目的語と同一指示の照応形と指示表現両方が含まれている、次のような例文である。

- (13) \*That each other<sub>i</sub>'s friends met John and Mary<sub>i</sub> surprised them.  
(Nakamura (1994a:92))

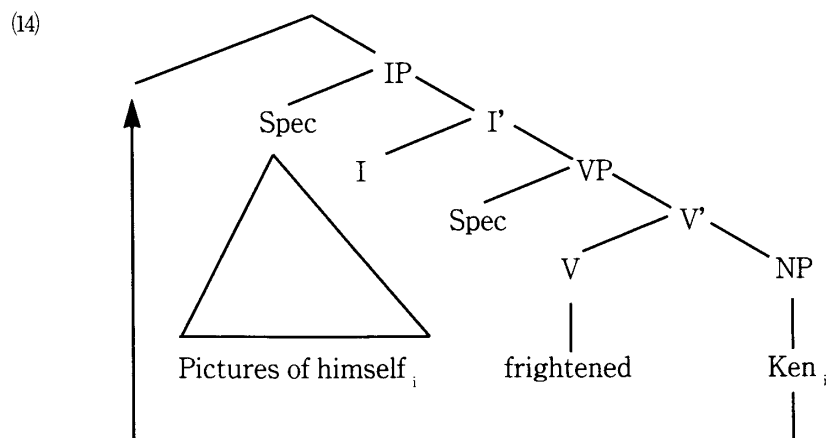
この文を非対格仮説で説明しようとする、主語はD-構造では目的語の下位にあるので、先行詞 *them* が指示表現 *John and Mary* と照応形 *each other* を両方とも c-統御する。指示表現 *John and Mary* に関しては、束縛原理 C は基底では適用されない仮定があるので、c-統御されても原理違反とはならない。一方、束縛原理 A は D-構造でもかかるので、照応形 *each other* が先行詞に c-統御されているこのレベルで充たされることになる。さらに、基底では目的語の下位にあった指示表現と照応形を含んだ要素は、S-構造では主語位置に移動しているが、ここでは先行詞との統御関係がなく、束縛原理 A, C 両方に抵触しない。以上のように、B & R のやり方では、(13) は束縛原理には全く抵触しないこととなり、適格な文となることを予測する。しかし、その予測には反してこの文は完全に非文法的な文である。

このように、非対格仮説のデータの説明力欠如は、大きな理論的欠陥であり、EO 動詞が非対格動詞であることに対する反論となると考えられる。

### 3.3 経験者繰り上げ仮説

#### 3.3.1 Campbell & Martin (1989), Stowell (1990)

EO 動詞が非対格動詞であるという仮説は非常に興味深い仮説であるが、これまでみてきたように多くの反例が認められることから、信憑性に欠ける仮説であると言わざるを得ない。非対格仮説の代案として、Campbell & Martin (1989), Stowell (1990) など提案された仮説が経験者繰り上げ仮説である。この仮説では、B & R がとはちがひ、EO 動詞は基底主語をもつ他動詞であるとした上で、目的語である経験者の項が繰り上がり、束縛原理 A を充たすという考え方がとられている。例えば、*Pictures of himself<sub>i</sub> frightened Ken<sub>i</sub>* は基底で他の他動詞と全く同じ次のような構造を持つと仮定され、論理形式で経験者の項が主語よりも高い位置に繰り上がり、束縛原理 A を充たすとされている。



しかし、Campbell & Martin, Stowellらは、この仮説を裏付ける経験的(empirical)な証拠を提示しておらず、ただEO動詞を他動詞であると考え、経験者の項が移動すれば、うまく逆行的束縛を説明できるという提案をしたのみにとどまっている。

経験者繰り上げ仮説に経験的証拠を提示し、その繰り上げの特性について詳細に論じたのが Nakamura(1993)(1994a)である。次節ではNakamura(1994a)の議論を概観する。

### 3.3.2 Nakamura (1994a)

経験者の繰り上げ(Experiencer Raising 以下ER) が実際に起こっていることを証明できれば、EO動詞が非対格動詞ではなく基底主語を選択する他動詞である証拠となる。Nakamura(1994a)ではその経験的証拠が提示されており、ERの特性について詳細な議論が展開されている。ここであげられているERの証拠のひとつとは、EO動詞を埋め込み文に用いた文には指定主語条件(Specified Subject Condition) 違反が生じないという事実である。

(6b)で示したように、主文の主語位置に先行詞があり、埋め込み文の目的語の位置に照応形があるとき、束縛原理A違反となり非文となる。

- (15) \*They<sub>i</sub> said that Ken met themselves<sub>i</sub>. (= (6b))

この文が非文となる本来の直感としては、先行詞と照応形の間に埋め込み文の主語(指定主語)が介在していることであつたので、(15)の例は特に指定主語条件(以下SSC)違反と呼ばれている。

ところで、Barss (1986) や Lasnik & Saito (1992) では、埋め込み文の中で照応形を含む目的語の話題化(topicalization)が起これると、主文の先行詞と適格な関係が結べるようになり、(16b)のようにSSC違反を回避できることが示されている。

- (16) a. \*They<sub>i</sub> said that Ken met themselves<sub>i</sub>. (SSC violation)  
b. They<sub>i</sub> said that themselves<sub>i</sub>, Ken met. (no SSC violation)

もしEO動詞を含む文に論理形式でE Rが起きるとすれば、埋め込み文にEO動詞を使うと、(16b)と同様の形がE R後に得られることとなる。さらに、論理形式で束縛原理Aがかかると仮定すれば、SSCの違反が回避できるという予測がたつ。次に示す(17b)を例に取ると、論理形式において経験者の項である *each other* が *the news* よりも高い位置に繰り上がることとなる。実際調べてみると、埋め込み文にEO動詞(*please*)を使った(17b)は、それ以外の動詞を使った(17a)とは異なり、適格な文となる。

- (17) a. ???John and Bill<sub>i</sub> thought that the car would hit each other<sub>i</sub>.  
b. John and Bill<sub>i</sub> thought that the news would please each other<sub>i</sub>.  
(Nakamura (1994a:91))

このEO動詞を含む文にはSSCが欠如しているという事実は、EO動詞が他動詞であり、E Rが実際に起こっている強力な証拠であると考えられる。



また、Nakamura(1994a)では、経験者繰り上げ仮説は、非対格仮説よりも正確に多くのデータを説明できるということが示されている。例えば非対格仮説では正しい文になると間違った予測をしてしまった(18) (= (13))の例文も、ERを仮定すると簡単に説明できる。

(18) \*That each other<sub>i</sub>'s friends met John and Mary<sub>i</sub> surprised them<sub>i</sub>.

つまり、先行詞 *them*が、ERによって論理形式で主語 *That each other's friends met John and Mary* よりも高い位置に繰り上がり、照応形を c-統御し、束縛原理 A を充たすが、同時に指示表現 *John and Mary*まで c-統御してしまい、束縛原理 C に抵触する。したがって、(18)は非文になると説明できるわけである。

さらにNakamuraは、ERを仮定すると、単に逆行的束縛現象が説明できるだけでなく、EO動詞を含む文には弱交叉効果(Weak Crossover Effect)がみられないことや、主語内寄与空所(Subject-Internal Parasitic Gap)が許されるという、特異な現象をも説明できることを示している<sup>6</sup>。これらの現象は非対格仮説では捉えられなかった現象であり、これらを説明できるということは、EO動詞を他動詞であるとする経験者繰り上げ仮説が非常に信憑性が高いことの裏付けであると考えられる。

以上、先行研究としてB&R以降の議論の流れを追ってみが、EO動詞が非対格仮説であるという主張は非常に問題点が多く、他動詞であるとみなした方が、事実を正しく説明できることは明らかである。これより、以降ではEO動詞は他動詞であると考え話をすすめることにする。

#### 4. EO動詞の特異性

Nakamura(1994a)では、ERの特性を吟味することに伴い、EO動詞の特異性が明らかにされている。本章では、このNakamuraの議論を再検討する。

##### 4.1 主題階層 (Thematic Hierarchy)

Nakamura(1994a)では、EO動詞を含む文の目的語である経験者の項は、その他の動詞を含む文の目的語とは異なり、なぜ移動を起こすのであろうかという問いが提示されている。

NakamuraはEO動詞を含む文のみに、特異的に移動が生じるその理由を主題階層(Thematic Hierarchy)に求めた。主題階層は、様々な文法現象には、述語(predicate=動詞など)が選択する項の主題役(Thematic Role)<sup>7</sup>の階層関係が係わっているとして、最初はJackendoff (1972) によって提案されたものである。ここでは Grimshaw(1990)の主題階層を示すことにする。

(19) 動作主 > 経験者 > 着点/起点/場所 > 主題

主題階層が一番高いのが動作主、次が経験者、以下に着点/起点/場所、一番下位が主題となる。

Nakamuraが注目したのは、EO動詞を含む文の構造的高さ関係と、主題階層の高さ関係に矛盾が生じているということである。(20)はEO動詞を含む文が、どのような主題役をどの位置に選択するかを示したものである。

(20) [<sub>NP</sub>主題 [<sub>VP</sub>EO動詞 経験者]]

つまり、樹形図では主語の方が目的語よりも構造的には高い位置にあるわけであるが、主題階層的に見ると、構造的に高い位置にある主語の主題の項が、構造的に低い位置にある目的語の経験者の項よりも低いわけである。

以上より、Nakamuraは、EO動詞を含む文に特異的に移動が生じる理由は、名詞句の構造的高さ関係と、主題階層の高さ関係の矛盾を解消するためであると意味づけた<sup>8</sup>。

#### 4.2 ERの随意性(Optionality)

ERが論理形式における義務的な移動であると考えと、どうしても説明できないデータがでてくる。それは次のような例である。

(21) John<sub>i</sub>'s picture frightened him<sub>i</sub>.

ERがかかると、目的語himが主語よりも高い位置に繰り上がり、Johnをc-統御してしまう。そうすると束縛原理C違反となり、不適格な文となることを予測してしまうが、実際(21)は適格な文である。

ところで、日本語には自由に語順が入れ替わっているようにみえるスクランプリング(scrambling)という現象がある。通常、移動はコストがかかるため、何らかの避けがたい要請によってしか生じ得ない最終手段(Last Resort)であるとされているが<sup>9</sup>、スクランプリングだけは特別なコストのかからない、随意的な移動であるという考え方がある。Nakamura(1994a)はこの議論をふまえ、ERが日本語のスクランプリングと束縛に関して同様の性質を持つことから<sup>10</sup>、ERとは論理形式で生じる一種のスクランプリングであるという考えを示している。そうすると、(21)の文法性が説明できる。つまり、ERは義務的ではなく、スクランプリング同様随意的であると考えと、目的語である経験者の項は基底の位置にとどまるというオプションと、ERによって主語よりも高い位置に繰り上がるという2つのオプションが許されることになる。(21)においては、ERが生じて主語よりも高い位置に繰り上がるというオプションを選択すると束縛原理C違反を引き起こし、非文となる構造となるが、基底位置にとどまるオプションを選択すれば、何の違反も生じず、適格な文となるわけである。このことから、EO動詞を含む文が束縛に関して違反を引き起こすのは、基底位置にとどまるというオプションを選択しても、ERで主語よりも高い位置に繰り上がるというオプションを選択してもどちらも原理に抵触する場合のみであり、どちらかのオプションが許される形であれば、適格な文となることになる。このように、ERが随意的であると考えても、データの説明力は

かわらない。例えば、非対格仮説では非文となることが説明できなかった(22)(=(18))も、次のように説明できる。

- (22) \*That each other<sub>i</sub>'s friends met John and Mary<sub>i</sub> surprised them<sub>i</sub>.

つまり、*them*が基底位置にとどまっていると主語位置の*each other*をc-統御できず、束縛原理A違反を引き起こし、ERで主語よりも高い位置に繰り上がると*John and Mary*をc-統御してしまい束縛原理C違反を引き起こす。どちらのオプションを選択しても原理に抵触するので非文となるわけである。

以上のERに関する考察より、EO動詞の特性を次のようにまとめることができる。

- (23) EO動詞は純粋な他動詞であるが、主語と目的語の構造的高さ関係と主題階層の高さ関係には矛盾があり、そのため論理形式においてERが随意的に生じる

次の章では現行のミニマリストの枠組みで、以上の考察を捉え直すとすればどうなるかということについて考える。

## 5. 逆行的束縛再考

### 5.1 生成文法の現在

序章で述べたように、現在生成文法ではChomsky(1993)に端を発する理論的な大変革がおこっており、現在の研究法はミニマリストアプローチと呼ばれている。このアプローチでは、これまで表示のレベルとして仮定されてきたD-構造、S-構造が、ここで必ずしも原理・原則(principles)をかける必要がないということから、排除されたことも大きな変化の一つである。現在、このミニマリストの枠組みのもとで、これまでGB理論の枠組みで説明されてきたことを捉え直し、さらに包括的に、さらに深く、人間言語の特性を捉えることができるよう、研究がすすめられている。

その中で、本稿で論じている束縛、つまりどのような名詞句がどのような位置に生じるかということに関する研究に目を移してみると、ある文の構造決定の際に、照応形の生起関係が高さ関係の証拠として利用されることは多々見受けられるが、活発に新しい議論が行われているという様相ではない。しかしその中で、Fujita(1993)は、ミニマリストの枠組みを取り入れ逆行的束縛を説明する試みをしている。以下では、まずEO動詞を含む文の逆行的束縛に関する問題点を再度整理した上で、Fujita(1993)の議論をふまえて、その問題点に新しい枠組みで説明を与えることについて考える。(なお以下では、日本語の訳語が確立していない新しい用語に関しては英語をそのまま使用することにする。)

## 5.2 逆行的束縛の問題点

先行研究より明らかとなった、EO動詞を含む文の逆行的束縛に関する問題点をもう一度整理してみたい。(24)が主語位置の照応形と、目的語位置の先行詞が特異的に適格な関係を結ぶことができる逆行的束縛と呼ばれる例である。

- (24) a. Each other<sub>i</sub>'s picture pleased John and Mary<sub>i</sub>.  
b. Pictures of himself<sub>i</sub> surprised John<sub>i</sub>.

4.1より、これらの文には、構造的には主語の方が目的語より高い位置にあるが、主題階層としては主題である主語より経験者である目的語の方が高いという矛盾がある。

- (25) a. Pictures of himself<sub>i</sub> surprised John<sub>i</sub>.  
b. 主語>目的語 (構造的)  
c. 主語(Theme)<目的語(Experiencer) (主題階層)

さらに、4.2のERの随意性に関する議論より、EO動詞を含む文の目的語と主語は、義務的に関係を結ばなければならないというわけではなく、むしろ関係を結んでも結ばなくても、どちらでも都合のいい方を選択できると言える。(26)はいずれもEO動詞を用いた文であるが、(26a)が目的語から主語への結びつきが義務的な場合であり、(26b)は目的語から主語への結びつきがあってはならない場合である。また、(26c)は結びついていなくてもいづれにしても支障を来し非文となる場合であり、(26d)は文内に同一指示の名詞句がないので、目的語と主語が関係を結んでも結ばなくても、いづれにしても支障を来さない場合である。

- (26) a. Pictures of himself<sub>i</sub> excited Tom<sub>i</sub>.  
b. Tom<sub>i</sub>'s picture excited him<sub>i</sub>.  
c. \*That each other<sub>i</sub>'s friends met John and Mary<sub>i</sub> surprised them<sub>i</sub>.  
d. The picture excited Tom.

(26)から、義務的である一方向的な名詞句間の結びつきだけを考えた理論では、束縛に関して随意的であるEO動詞の特異性は説明できないことがわかる。例えば、主題階層の高い項の中にある先行詞が、主題階層的に低い項の中の照応形を束縛できると、主題階層の見地のみから束縛を一般化する考え方があるが<sup>11</sup>、このように考えると、必ずしも主題階層の高い項から低い項への関係が結ばれていない、(26b-c)のような文が説明できなくなってしまう。非対格仮説に関しても、(26)の随意的な部分を説明できなかったことが欠陥につながった。このことから、この随意性をどのように説明するかが重要なポイントとなることがわかる。

次節では、以上の問題点をミニマリストの枠組みで捉え直すための提案を行う。

### 5.3 新提案

既に述べたように、ミニマリストアプローチでは、これまでのアプローチとの多くの違いがある。本節ではまず、その中で著者がおおよそどのような立場をとるかを示すことにする。

第一に、逆行的束縛現象を説明するに当たり、次のことをこれまでのアプローチ同様仮定する。それは

- (27) 先行詞と照応形の関係は構造的な支配関係に基づいて決定される

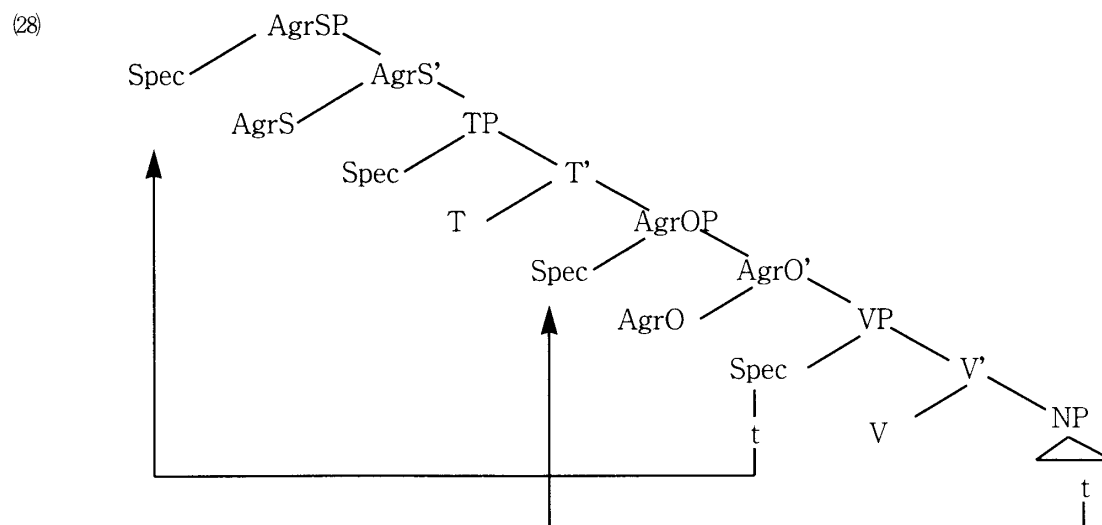
ということである。言い換えれば、先行詞と照応形が適格な関係を結ぶためには、先行詞が照応形をc-統御しなければならないわけであり、これまでの流れを踏襲して、このような関係がある場合、先行詞が照応形を「束縛」し、束縛原理Aを充たすと言うことにする。

また、ミニマリストの考え方では、論理形式で指定部・主要部の一致(spec-head agreement)により、formal featureがcheck offされる。これは、語彙情報が重要視されている考え方であるといえる。本稿でもこの立場をとることとする。

以上と同様の立場で、逆行的束縛に説明を試みた進歩的な研究として、Fujita(1993)がある。次節では、このFujitaの論文から考察を加える。

#### 5.3.1 Fujita(1993)からの考察

Fujita (1993)は、ミニマリストの枠組みでは、論理形式で目的語が素性チェックのために、動詞句よりも高い位置（AgrOの指定部の位置）に繰り上がることに注目し、逆行的束縛に説明を試みている。つまり、EO動詞を含む文に動詞句内主語仮説(VP Internal Subject Hypothesis)を採用すると、論理形式では主語の痕跡(trace)が素性をチェックするために繰り上がった目的語に支配される位置にあることになり、連鎖束縛(chain binding)によって束縛原理Aが充たされるというのである。



このことを簡略化して書くと(28)のようになる。

Fujita(1993)のこの主張は非常に興味深いが、いくつかの問題点がある。まず、すべての動詞に対して動詞句内主語仮説をとるならば、EO動詞以外の他動詞においても、許されないはずの逆行的束縛が許されることになってしまう。このことに関してFujitaは、EO動詞と異なり、他の他動詞の主語痕跡の位置（GB理論的に言うならば基底の位置）は、目的語が繰り上がるAgrO指定部よりも高い位置にあると仮定しているが、証拠は提示されていない。また、決定的な問題点としては、目的語から主語への束縛が義務的なこのシステムでは、非対格仮説同様、4.2で問題点として示した、EO動詞を含む文の束縛の随意性を全く説明できないということがある。

しかし、問題点はあるにしろ、ミニマリストの枠組みで逆行的束縛を説明する可能性を示したことは十分評価できる。次節では、Fujitaの考え方をふまえて、EO動詞を含む文の束縛の随意性を説明する方法について考える。

### 5.3.2 内在格 (Inherent Case)

論理形式でcheck offされるformal featureの中には抽象的な格(Case)の特性が含まれる。格には構造に基づいて付与される構造格(structural Case)と、語彙的に主題役と結びついている内在格(inherent Case)の2通りがある。このうち、上述のように論理形式においてcheck offされなければならないのは構造格であり、内在格に関しては、チェック法が確立されていないという現状である。EO動詞を含む文の逆行的束縛の随意性に説明を試みるに当たり、この内在格に注目したい。

内在格の特性や、どのような構文のどのような要素が内在格を持つかということに関する、統一的な研究は著者の知る限りない。したがって、内在格に関する厳密な議論は今後の研究に委ねなければならない部分が多い。そこで、本稿では、Fujita(1993)のシステムを取り入れ、さらに、EO動詞を含む文と、内在格の特性に関して、どのような仮定をすれば逆行的束縛の随意性を説明できるかという、可能性を提示するにとどめておくことにする。

明らかに内在格を持つと考えられている例に、難易構文(*tough construction*)の*for*句がある。この*for*句は典型的な経験者の項であるとされている。このことから、まずEO動詞の目的語である経験者の項も内在格である可能性があるかと仮定する。

本稿でFujita(1993)のシステムの問題点として指摘した、EO動詞を含む文の束縛に関する随意性を以上の内在格に関する仮定から導き出すとすれば、さらに以下のような仮定を加えた、2通りの方法が考えられる。

- (29) a. 内在格は指定部・主要部の一致でcheck offされる必要がない
- b. EO動詞を含む文の経験者は内在格を持つ場合と構造格を持つ場合がある
- (30) 内在格は指定部・主要部の一致で必ずしもcheck offされる必要がない

(29)のように考えると、束縛の随意性を、EO動詞を含む文が2通りの構造をもつことから導くことになる。つまり、EO動詞の目的語には構造格と内在格という2つのオプションがあり、構造格の場

合には逆行的束縛が許され、内在格の場合は許されないことになる。また、(30)のように考えると、内在格の特性から束縛の随意性が導かれることになる。つまり、内在格は指定部・主要部の一致によってcheck offされる場合とされない場合があり、check offされる場合にのみ、逆行的束縛が許されるという説明となる。

(29)(39)のどちらが適切な説明の候補なのかということについては、断定できない。例えば、(29)に関しては、EO動詞の目的語にはなぜ格に関して特異的に2つのオプションがあるのかということが問題として残るし、(30)に関しては、他の構文と照らし合わせて、内在格の特性をさらに詳細に検証する必要性が残る。(29)では、構造格、内在格の違いが、意味の違いに還元できれば非常に強い議論となるはずである。以上の問題点、及び、このように考え方をしたときに、前章で論じたERの特性との整合性はどうかということなどについての議論は、今後の研究課題としたい。

## 6. 結 語

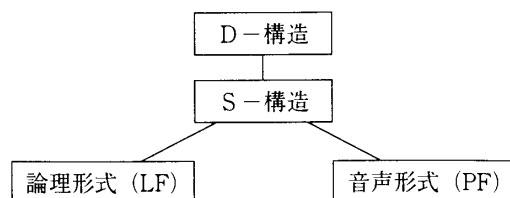
EO動詞を含む文は、多くの特異的な特性がある。中でも、いわゆる逆行的束縛と呼ばれる現象に対しては、これまで、多くの研究者が注目し、様々な特性が明らかにされてきた。しかし、Chomsky(1993)による、理論的な大変革に伴い、現在のミニマリストの枠組みで、もう一度この現象を捉え直す必要がでてきた。

本稿では、まず先行研究の流れをたどり、逆行的束縛に関する問題点を明らかにした。そして特に、Nakamura(1994a)で指摘された、逆行的束縛の随意性をFujita(1993)の枠組みで説明する可能性のひとつとして、EO動詞を含む文の目的語である経験者の項は内在格を持つと仮定することを提案した。

（なかむら・のりお 産業情報学科）

注

- (1) Chomsky(1981)(1986a)タイプの、原理とパラメータのアプローチ(principles and parameters approach)をとる理論を指す。GB理論では次のような表示のレベルが仮定されている。



詳しくは上述のChomskyの著作、及び原口・中村(1992)などを参照のこと。

- (2) Chomskyとともに、生成文法理論を作り上げてきたひとりである現在南山大学の斉藤衛教授も、1996年度の筑波英語教育学会における講演及び、著者との個人的対話の中で、コアのデータをしっかり持つことの重要性を強調された。

(3) 一見、束縛原理Aでは説明できないようにみえる次のようなデータもある。

(i) a. John and Bill<sub>i</sub> seem to each other<sub>i</sub> to t have proposed to her.

b. \*John and Bill<sub>i</sub>, I told to each other<sub>i</sub> that Mary loved t.

これらの文では、ともに先行詞である*John and Bill*が、*each other*を統率範囲内でc-統御しており、束縛原理Aを充たすと考えられるが、(7b)は非文となる。(tはD-構造における先行詞の位置を表す)

GB理論では、これらのデータも束縛原理Aで説明がつくとされており、その際に用いられるのは、語の生じる位置の特性に関する考察である。様々な文法現象の観察から、語が生じる位置に、基底のレベルであるD-構造において文法項(argument)が生じることが出来るA位置と、生じることのできないA'位置という区別が必要であるという考え方がある。この考え方を束縛原理にも適用し、束縛原理Aに関与できる先行詞は、A位置にあるものだけであるとすれば、(ia)では先行詞*John and Bill*が主語A位置にあるので、照応形を束縛でき、適格な文となるのに対し、(ib)では先行詞が話題化の焦点であるA'位置にあるので、照応形を束縛できず、不適格な文となると説明できるわけである。先行詞がA位置にある束縛関係はA束縛と呼ばれている。

(4) 述語が選択する名詞句(項)に与えられる意味役割(=主題役)のひとつで、ある心理状態を経験する名詞句を指す。経験者の他には、動作主(Agent)、着点(Goal)、起点(Source)、場所(Location)、主題(Theme)などがある。

(5) その他のB&Rに対する反論については、Pesetsky(1990), Hashimoto(1991), Campbell & Martin(1989)などを参照。

(6) 詳しくはNakamura(1993:48-62), Nakamura(1994a:96-100)を参照。

(7) 脚注4を参照。

(8) このように考えると、必然的に構造的高さ関係と主題階層の矛盾は、EO動詞含む文以外の構文でも生じ、そのような場合にもERのような移動が起こるのかという問題が出てくる。Nakamura(1994a:95)では、二重目的語構文の受動態の例から、その可能性が示唆されている。

また、その他の構文とERの係わりについては、Campbell & Martin(1989), 中村(1994b)などを参照のこと。

(9) Chomsky(1986a)を参照。

(10) Nakamura(1994a:93)を参照。

(11) Jackendoff(1990)などを参照。

## 参考文献

1. Barss, A. (1986), *Chains and Anaphoric Dependence, On Reconstruction and Its Implication*. Doctoral Dissertation, MIT.
2. Belletti, A. & L. Rizzi (1988), "Psych-verbs and  $\theta$ -theory," *NLLT* 6, 291-352.
3. Campbell, R. & J. Martin (1989), "Sensation Predicates and the Syntax of Stativity," *WCCFL* 8, 44-55.
4. Chomsky, N. (1957), *Syntactic Structures*. Janua Linguarum, Series Minor, No 4. The Hague: Mouton. 勇康雄(訳) (1963), 『文法の構造』 東京: 研究社.



5. Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 安井稔(訳) (1970), 『文法理論の諸相』 東京：研究社.
6. Chomsky, N. (1975), *Reflections on Language*. New York: Pantheon Books. 神尾昭雄・西山佑司(訳) (1979), 『言語論』 東京：大修館.
7. Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris. 安井稔・原口庄輔(訳) (1986), 『統率・束縛理論』 東京：研究社.
8. Chomsky, N. (1986a), *Knowledge of Language: Its Nature and Origin and Use*. New York: Praeger.
9. Chomsky, N. (1986b), *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
10. Chomsky, N. (1993), "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, eds. K. Hale and S. J. Keyser, 1-52, Cambridge, Mass.: MIT Press.
11. Chomsky, N. (1994), "Bare Phrase Structure," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
12. Grimshaw, J. (1990), *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
13. Fujita, Y. (1993), "Object Movement and Binding at LF," *Linguistic Inquiry* 24, 381-388.
14. 原口庄輔 & 中村 捷 (1992), 『チョムスキー理論辞典』 東京：研究社.
15. Hashimoto, M. (1991), "On the "Unaccusativity" of Psychological Verbs," *Tsukuba English Studies* 10, 239-251.
16. Lasnik, H. & M. Saito (1992), *Move -  $\alpha$* . Cambridge, Mass.: MIT Press.
17. 中村 捷・金子義明・菊池 朗 (1989) 『生成文法の基礎』 東京：研究社.
18. Nakamura, N. (1993), "On Psych-Verbs in English," unpublished M. A. Thesis, University of Tsukuba.
19. Nakamura, N. (1994a), "Psych-Verbs and the Experiencer Raising Hypothesis," *Proceedings of the 7th Summer Conference 1993*, Tokyo Linguistics Forum, 87-106.
20. 中村典生 (1994b), 「英語の中間態構文について」『平成5年度土浦第一女子高校研究紀要』 81-95.
21. Jackendoff, R. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
22. Jackendoff, R. (1990), *Semantic Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
23. Pesetsky, D. (1990), "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," ms., MIT.
24. Saito, M. (1992), "Long Distance Scrambling in Japanese," *East Asian Linguistics* 1, 69-118.
25. Stowell, T. (1987), "Arguments, Adjuncts, And Crossover," ms., UCLA.
26. Stowell, T. (1990), "Binominal *Each*," paper presented at Meiji Gakuin University.
27. Takano, Y. (1996), *Movement and Parametric Variation in Syntax*. Doctoral Dissertation, Univ. of California, Irvine.
28. Tada, H. (1993), *A/A-bar partition in derivation*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
29. Ura, H. (1996), *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

## Backward Binding Reconsidered

Norio Nakamura

The purpose of this study is to examine the exceptional binding phenomena with EO verbs, and attempt to give an explanation for them within a framework of the minimalist approach.

I point out the following crucial properties of the sentences involving EO verbs.

- (1) The relative order of the arguments taken by EO verbs is not compatible with the thematic hierarchy.
- (2) Backward binding is not obligatory but optional.

Furthermore, I show that backward binding can be captured within a framework of the minimalist approach, if we regard Experiencer arguments taken by EO verbs as bearing inherent Case.

*Key words:* generative grammar, psychological verb, minimalist approach, backward binding